
エクスタス
オンライン
ecstas online
03.
アダルトモードと
課金の狭間で
ポエムを叫ぶ魔王
久慈マサムネ
イラスト◆平つくね
角川スニーカー文庫
メロンブックス限定 書き下ろしショートストーリー

人待ち顔の毒島メグ

「あぁー疲れたー」

毒島メグはベッドの上にダイブした。硬めのスプリングが体をしっかりと受け止める。

「はぁ……キモチいい……」

ひんやりしたシーツが心地良い。メグは割り当て地域の調査を終えて、ラグーナのホテルに戻ってきたところだった。

朝霧の呪いは日に日に進んでいる。いつあの呪いが自分たちに降りかかるかも知れない。だから解除方法と、サタン軍の動きを探る為に調査は必要だ。

「っていうのはわかるんだけど～めんどー……」

ダブルサイズのベッドの上をごろごろ転がる。数日ぶりのベッドの感触を楽しんでいたが、だんだん退屈になってきた。

アゲハと扇谷は一緒のチームだったので顔を見飽きているくらいだが、他の2Aギルドとは顔を合わせていない。

——朝霧の様子を見に行く？　でも、そこまで仲良くないし。食事のときに顔を合わせるだろうから、別にいいか。あと顔が見たいと言えば、アキラかな。

そう心の中で呟いたのに、不思議と頭に浮かんだ顔は違っていた。

……なんでアイツ？

堂巡駆流。二年A組のスクールカーストの最下層。自分のような上位に君臨する者とは身分が違う。実際、今まで気にしたこともなければ、相手にしたこともない。

なのに、最近妙に引っかかる。それはラムル山脈のダンジョンでの一件が原因なのは明らかだった。あのときの自分はどうかしていた。何であんな奴に迫ったのか、未だに分からない。だが、あんなことが他人に知られたら、自分の地位が下がるどころか、社会的に終わりだということは分かっている。それに、自分は遊びや軽い気持ちでああいうことはしたくないと考えている。本気で好きになって、結婚してもいいと思える相手でなければイヤなのだ。

だから他人には決して知られたくない。幸い、堂巡はそのことを他人に自慢もしなければ、それを盾に脅すようなマネもしない。

意外と紳士的というか、悪い奴じゃない気がしてきた。そう思う内に、いつも意識するようになって——、

「んなことない！　気のせいだし！　うちがあんなヤツのことを考えてるなんて、意味わかんない」

それにあの男、このところ一人で出かけたっきり戻って来ない。一体、どこで何をやっているのだろう？　単独で調査をしたいというのは、ぼっちらしい希望だが——、

「自分勝手すぎるし」

ベッドから起き上がると、部屋を出た。そのときちょうど、入り口を開けて誰かが入ってくる音がした。

毒島は、はっとして足早に玄関へ向かった。二階の踊り場から下を見ると、ロビーに三人の人影がある。雛沢、悠木、有栖川のチームが帰ってきたところだった。

「なんだ……」

毒島は、がっかりしている自分に驚いた。自分は一体、何を期待していたのか？　そう自分に問いかけても答えは返ってこない。

「あれーメグぅ。どしたの～？」

びくっと体が跳ねた。振り向くと、そこにはさっき一緒に帰ってきた宮腰蝶羽がいた。

「あ……アゲハ？　もー驚かせないでよ」

「っていうか、なんでそんな驚く？」

「え、べつに……ちょっと考え事してて……」

宮腰は毒島の肩越しに一階のロビーを見おろした。

「はーん……残念だね～堂巡がいなくて」

「は!?」

毒島の頭に一気に血が上った。

「な、なんっ！　それっ！　い、い意味わかんないし！　ど、どうしたの、あ、アゲハだいじょうぶ？　ちょ、ちょっとヘンだし」

宮腰は身を乗り出す毒島をなだめるように、その肩を押さえた。

「あーごめん、ごめん。アゲハちょっと勘違い？」

「勘違いすぎ！　ほんっとキモイこと言うなし！」

「はーい。んじゃ、下でお茶でも飲も？」

「……いいけど」

宮腰の後について、毒島は階段を降りていった。何とかロビーに下りるまでに、赤くなった顔が元に戻らないだろうか、と考えた。

「エクスタス・オンライン　03. アダルトモードと課金の狭間でポエムを叫ぶ魔王」（角川スニーカー文庫）

